

新潟・新津支部

原爆展は 班で開催した方がいい!

要求いっぱい
会員大募集!



来場者名簿と感想文用紙、新婦人しんぶんと原爆展用の入会リーフを用意して

全14班で原爆展を開催
この夏、新津支部は全14班で原爆展を開き、仲間を迎えたい

す。支部は今年の春から常任委員8人が、班委会に2人で「お邪魔させて」と参加し、班の悩みや困っていることを聞き、班の様子をつ

かんできました。支部委員会も班長合同会議にし、どの班も複数で参加し、班で話し合い、とりくんだことを交流、学び合い、班活動に生かしてきました。

被爆80年の今年こそ原爆展をひろげたい、仲間づくりと一体にとりくもうと委員会で話し合い、昨年まで支部主催、市内1カ所できりくんできた原爆展を班で開こうと提案しました。各班が持ち帰って相談し、「うちの班だけでは無理」というところは「合同で」など工夫し、全班での開催が決まりました。会場や日程、どうお誘いするかなど、合同でも班も相談会をもって

来場者の半分以上が知り合い



地域の歯科医院の待合室でも開いた(すずらん班)

すると、「原爆パネルを見て平和の大切さを感じた」と入会。来場者の半数以上が会員の知り合いだったのも班開催だからです。来場者も受付に知っている人がいると安心

「平和の新婦人」が自信、仲間も
二つ目は地域の人に「平和の新婦人」を知ってもらい、新たなつながりをつくられたことです。仲間づくりの相談でも「あの人が来てくれたよね」「誘ってみたいよ」と、お誘いしたい人の顔が浮かんできます。5班合同で開いた新町の地域は、後口きてくれた読者を訪問して入会につながりました。

「あの人があんなにやさしい」と誘い、きつてくれた知人に「創立時から核兵器廃絶など運動を続けてきた『平和の新婦人』」を知っています。

被爆80年ということもお誘いの力になりま

なっています。

も「私たちががんばらなきゃ」と積極的に。その後の仲間づくりに初めて参加してくれる人もいて、班や会員の变化にもつながりました。四つ葉班も訪問で会員を迎えています。これまでに7班が仲間づくり行動にとりくみ、5班で仲間を迎えました。

前大会現勢突破まであと34人。この経験を力に、「原爆展にきてくれた知人に」「読者を会員に」など、誘いたい人をみんなで出し合っ、仲間を迎えよう。来年も班で原爆展を開き、地域に平和の新婦人を知らせようとお話しています。

主張

8月26日、政府の男女共同参画局が「第6次男女共同参画基本計画策定にあたって基本的な考え方(素案)」(以下「素案」)を公表し、9月15日まで意見募集をしています。「基本計画」は男女共同参画社会基本法(1999年施行)にもとづき5年ごとに策定し、今回は6次です。これまで、国際社会で50%とされる各分野の女性比率目標を30%としたまま、衆議院女性議員比率は15.7%など低水準のままです。「素案」は、働き方、暴力や貧困、防災、各種社会制度、教育やメディアなど12分野にわたります。

第6次男女共同参画基本計画に 女性たちの声を届けましょう

す。意見募集を公表後20日で締め切るなど国民の声を反映しようとする姿勢といえます。基本法では、「憲法の個人の尊重と、男女平等、国際社会とも連動、男女共同参画社会実現を21世紀の我が国

方向を打ち出す一方で、男女賃金格差是正や正規雇用化、労働時間短縮の法制化を打ち出すこともなく、「意識」や「周知」「啓蒙」の課題とするものです。選択的夫婦別姓については、28年ぶりの国会審議も反映せず、「家族の一体感」を強調、「さらなる検討」としています。女性差別撤廃委員会の日本への勧告の指摘の数々を受け止めたものとはなっています。それぞれが関心のあるテーマで意見や要求を提出していきましょう。※意見募集は男女共同参画局のホームページから送信できます。

〈最終回〉 いま教室で 子どもたちは



公立小学校教諭 藪内恵

いよいよ、連載も最後です。2学期が始まり、いつもの日常になりました。生活習慣、学習のこと、人間関係のこと、子どもを育てる親の悩みは尽きません。

「こうあるべき」という大人側の期待や思い込みから生まれている悩みでもありません。以前、「不安を作っているのはだれか」という話題に触れましたが、例えば「早くしなさい」というのは、親の時間軸に子どもを合わせようとするから。「いつまでゲームしてるの」と言えは言つほど、ゲームを止めさせなければならぬという気持ちが強まります。悩みや不安を大きくしているのは大人側の心の持ち方かもしれません。もちろん「しっかりしたい」「ダメなものダメ」という葛藤があります。大切なのは、「子どもの行動を

私たちが人生の創作者

えなければこの視点を自分はどう関わるか」の視点に戻すことです。認知行動療法では、人の気持ちや行動は「できごと」ではなく「そのできごとの捉え方」に影響を受けると考えられています。例えば、子どもが宿題を後回しにしている姿を見たとき、親が疲れていれば「やる気がない」という一側面で決めつけて怒りや不安が募ります。しかし、「学校で疲れたのかもしれない」「自分で切り替える力を育てるチャンス」などの視点になれば、子どもへの声掛けも自然に変わります。



毎年2学期の始業式に、子どもたちにプレゼントしている折り紙

す。私が教育や子育てで大切にしたいのは、まず「お母さん・お父さんが幸せを感じる世の中」をどう創れるかということ。何が正解なのかを求めるより、対話しながら子育ても自分の夢も開いていける場を増やしたい。時間や気持ちの余裕は、人生を創造的に考えるために欠かせません。もし、悩みや不安を抱えたら思い出してください。「人生の創作者は、子どもでもなく周りでなく、他ならぬ私自身」だと信じています。

